

新型コロナウイルス感染拡大予防対策における学校レポート from アメリカ (第3回)
ー学校閉鎖後のスクールサイコロジストの1日ー

CA 州公認 School Psychologist 池田真依子

アメリカからのレポート第3回では、学校閉鎖後のスクールサイコロジスト (以下SP)の一日の活動を描写する。どの教員、スタッフも直面していると思われる在宅勤務の難しさを、私自身も身に染みて感じている。特に小学2年生と4年生の児童をもつ親として、長引く自粛生活、オンライン学習の強化と私自身の職務の増加が比例しており、ここ数週間のストレス度は明らかに高くなっている。したがって一般的とは言えないかもしれないが、他のSPとの交流やウェブ上で公開されているSPへの期待される職務などを元に、この状況下で求められる客観的かつ普遍的なSPの役割を、ある日の行動を紹介しながら示したい。

朝8時：普段なら出勤時間。息子二人と素早く朝食を済ませ、それぞれの一日の流れを確認する。予定されているオンラインミーティングや課題・宿題を確認し、ワークスペースの確保をしたら、まずはメールチェック。状況が日々刻々と変化するためメールには迅速な対応が求められる。そして、校内でカウンセリングや行動サポートを行っていた児童生徒への「チェックイン」コンタクトリストを作成する。三月中旬、休校措置がとられてからすぐに設置したのが「オフィスアワー」(児童生徒や保護者から連絡して相談できる時間帯)だった。勤務する学校のスクールカウンセラー(以下SC)と協働し、児童・生徒のみならず、保護者、教職員が直面する心理教育的ニーズにリモートで対応できるようにとの意向である。公私を分けるための措置として、無料番号付与サービスを利用して獲得した携帯電話番号を公表した。

チェックインとは、「様子はどうか」とカジュアルに「声かけ」「目配り」することである。休校前もカウンセリングの代わりにケースによって採用していた(例：カウンセリングは必要ないが、週に1回、または2週に1回注意が必要な子へ5～10分程度声かけをする)。「カウンセリング」では保護者の同意を必要とし、チェックインでは必要としない。以前からカウンセリングを受けていたり、個別教育計画(IEP)にサービスが組み込まれていたりすればテレカウンセリングを行うことになっても問題ないが、保護者の同意がない場合チェックインをした上でカウンセリングのニーズを判断する。休校措置が始まった時点で年度は半年以上過ぎていたため、それまでに蓄積した情

報があった。その情報を元に、どの児童生徒が高いニーズを抱えているかをある程度把握し、SCと手分けしてリストを作っている。

オンラインでカウンセリングを受ける児童・生徒もいる（テレセラピーという）が、私の場合、時間や状況の都合上チェックインが中心である。テレセラピーについては、注意事項や実際の方法などを別に述べたいと思う。

さて、チェックインで得た内容によって、校長や担任教師、ケースマネージャー（特別支援教育の教員）、サービスプロバイダー（Occupational Therapist：作業療法士、Speech & Language Pathologist：言語聴覚士、Adapted Physical Education Specialist：特別支援の体育教員、また提携しているカウンセリングエージェンシーのセラピストなどと情報共有して連携を図る。SPからのコンサルテーションとなることもある。また、スタッフや外部との連携の記録はもちろんのこと、生徒や保護者への連絡を全て記録しておくことは、管理職から再三要請されている。

朝9時：ほぼ毎日、この時間から子どものディスタンスラーニング（オンライン学習）が始まる。ひと段落すると、課される課題へのサポートをしながら、さらにSPの仕事を進める。毎週月曜日に配信される「学校便り」へ、SEL（Social Emotional Learning）関連、ストレスチェック、その発散法、思考法など様々な題材を簡潔にまとめて寄稿するのも、SPの可視性を上げるため重要な仕事である。学校便りは在籍するすべての子どもの家庭にメールで配布される。

お昼の時間：時間はあっという間に過ぎる。子どもたちは公立学校区から配給されるランチ（学校対策レポート1、2を参照）を取りに行き、私も簡単に昼食を済ませる。その間が束の間の休み時間となったり、家事や集中したい仕事を片付ける時間となったりしている。

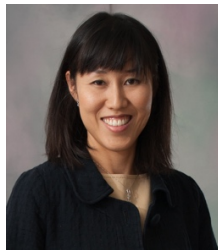
午後1時：子どもたちのディスタンスラーニングや課題は続く。私も、ウェビナー（ウェブでの研修）への出席、同僚とのオンライン会議（校長やSCとの連携、特別支援教育チームや学校区・ディレクターとのやりとり）がほぼ毎日入る。ウェビナーは、テレワークに関するものだったり、メンタルヘルス関連、オンラインアセスメントの実施についてだったり様々であるが、現在の状況に対応した最先端の内容である。長い時間で2時間半、出席する。

午後4時：普段この時間にはオフィスを後にする。しかし、通勤時間もない代わりに線引きもない在宅ワーク。子どもへの対応で削られた時間や集中できない時間を埋め合わせるかのように、4時以降も続けることもあれば、子どもの就寝後に仕事を再開する

こともある。どの家庭でも、この状況に適応し工夫しているのと同様、私も育児と職務遂行の両立を模索しているところである。

先日（4月29日）、上司（Director of Special Education）とのミーティングで通達された事項が、今後の在宅ワークに大きな変化をもたらすと予想される。普段のSPの職務は、ケース毎に法的に決められた締め切りに追われることも多いが、今後テレアセスメントを法的に決められた期日で極力進めることが要請された。つまり、締め切りは健在ということである。しかしこのことについては、法に準拠した対応の仕方が日々変わるので、引き続き注視しなくてはならない。これからもアップデートをしていきたいと思う。

以上のように、まさに刻々と変わる状況の中でSPに期待されることも変化しているといえる。時間はあっという間に過ぎるが、夕方5時、カリフォルニア州の日が落ちるのは遅い。お互いにストレスを溜めている息子たちと、ソーシャルディスタンスを保ちながら散歩に行ったり自転車に乗りに行ったりするのが息抜きとなっている。



著者の紹介：池田真依子 サンディエゴ在住のスクールサイコロジスト。通訳・翻訳者。筑波大学大学院教育研究科・臨床教育学修士、サンディエゴ州立大学カウンセリング学科学校心理学プログラム修了（MA & Ed.S）。日本にて小中学校職員・カウンセラー等、カリフォルニア州にて自閉症行動セラピスト、特別支援学級職員としても勤務。

学校心理学からのコメント：サンディエゴの臨時休校時におけるSPの一日から、SPの仕事ぶりと子どもの様子が分かりました。学校便りとすべての児童生徒と保護者の相談にのるためのオフィスアワー、また気になる児童生徒へのチェックイン（声かけ）は、休校時における一次的援助サービス、二次的援助サービスの例として参考になります。ガイダンスなど一次的援助サービスに強いスクールカウンセラーや二次的・三次的援助サービスに強いスクールサイコロジスト、作業療法士・言語聴覚士・特別支援の体育教師などの専門スタッフは、日本でのチーム学校の構築に参考になります。日本でも各学校がもつ資源を最大限活かしたチームで、子どもや保護者の「学校生活」を援助していると思います。（石隈利紀）